

# WEEKLY REPORT

2018-2019年度  
国際ロータリー会長  
パリー・ラシン



承認/1965年 6月 25日  
例会日/毎週木曜日 12時 30分  
例会場/江南商工会館1F 大ホール  
江南市古知野町小金112  
TEL 0587-54-8132

事務局/江南商工会館別館1F  
〒483-8205 江南市古知野町小金112  
TEL 0587-55-6554 FAX 0587-59-7720  
URL <http://www.kounan-rc.com/>  
e-mail [kounanrc@beach.ocn.ne.jp](mailto:kounanrc@beach.ocn.ne.jp)  
会長/片平博己 幹事/波多野智章 会報・広報雑誌委員長/猪子明



## 2019年(平成31年) 2月 28日 (木)雨 第2641回(当年度第27回)例会

点 鐘 会長 片平 博己君  
司 会 SAA 近藤 道彦君  
ロータリーソング斉唱 「それでこそロータリー」  
四つのテスト唱和

— 言行はこれに照らしてから —

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

会長挨拶 会長 片平 博己君



近い人がなくなると、「死」について考えてしまいます。どのように死んでいくのかは、どのように生きてきたかと表裏一体だと思うからです。良寛さんの辞世の句に

「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」

というのがあります。死期の迫った良寛さんのもとに駆け付けた、貞心尼の耳元でつぶやいたと言われています。「あなたには、自分の悪い面も良い面もすべてさらけ出しました。その上であなたはそれを受け止めてくれましたね。そんなあなたに看取られながら旅立つことができます」という貞心尼に対する深い愛情と感謝の念が込められています。そして、良寛さんの着飾らなく真摯な人柄に心が和み、幸せな気持ちにもなります。

また、日本人の死生観として「武士道」があります。「武士道とは 死ぬことと 見つけたり」という文に代表されます。正岡子規は、江戸末期、四国松山に武士の子として生まれ、「武士道における覚悟とは何か」を自問自答し、「いついかなる時でも平気で死ぬることだ」という一つの結論を得ていました。その後、若くして脊椎カリエスに罹り、三十代半ばで亡くなってしまおうのですが、この病気はすさまじいほどの激痛を伴うもので、何度も自殺を覚悟したと言います。その苦しみの中で彼は悟ったそうです。本当の武士道における覚悟とは、「痛くても苦しくても生かされている今という一瞬を平然と生きることだ」と言うのです。だから彼は、どんどん痛みを増していく病床にあって、死の瞬間まで文筆活動を止めず、自分らしく輝き続けました。

お二人の生きざま、死にざまを見たとき、当然、死ぬことは怖いですが、綺麗ごとではないとは思いますが、今できることは、頑なにならず素直に強み弱みも見せながら自由に、いろいろ難しいこともあるけれど、今この瞬間を大切に生きていくことが大事だなと思います。皆さんはどのようにお考えになりますでしょうか？

幹事報告 -別紙- 幹事 波多野 智章君

祝 福 -別紙- 岩田 静夫君

出席報告 尾関 憲市君

会員数	出席者数	欠席者数	出席率
45名	31名	14名	75. 61%
前々回 欠席者3名(2月7日)			
補正出席率 92. 11%			

ニコボックス 尾関 憲市君  
○卓話をさせて頂きありがとうございます。

檜木 治幸君

○岩倉ロータリークラブクラブフォーラム檜木 治幸様  
江南ロータリーへ ようこそおこしくございました。  
本日の卓話大変楽しみです。

片平 博己、加藤 義晴、波多野 智章、暮石 哲真各君

○ようこそ岩倉 RC 榎木 治幸君

卓話、楽しみです。

伊藤 鶴吉、岩井 正彦、倉知 正憲、松岡 一成、  
杉浦 賢二、沢田 昌久、岩田 静夫、長瀬 晴義、  
中村 耕司、木本 寛、濱島 聡一朗、岩田 進市、  
近藤 道麿 各君

卓 話

岩倉ロータリークラブ 会長エレクト  
医療法人あすなろ岩倉メンタルクリニック理事長  
榎木 治幸様  
「ロータリアンの知らない精神科の世界」



江南 RC の皆様には平素より大変お世話になっております。また今回は卓話者としてお招きいただきありがとうございます。本日は、ロータリアンの皆様は、あまり精神科に馴染みがないと思いますので「ロータリアンの知らない精神科の世界」と題してお話させていただきます。

精神科の扱う疾患は、統合失調症、うつ病・躁鬱病、パニック障害、強迫性障害、摂食障害(拒食症・過食症)、アルコール依存症、ADHD、性同一性障害など多岐にわたっていますが、本日は統合失調症を中心にお話させていただきます。

統合失調症は、思春期に発症し、その後長い年月、病気と付き合いがなければならぬという点で非常に大変な疾患です。様々な攻撃的な内容の幻聴や、いろいろなことが自分と繋がっているといった被害的な内容の妄想、自分の思っていることが他人に伝わってしまうといった感覚など、どれも辛いものばかりです。

私が医者になった 30 年ほど前は、こういった症状に対する薬はありましたが副作用も大きく入院治療が中心で、十年以上も入院されている患者さんも珍しくありませんでした。病識を持たない患者さんも多く、高校時代に発症し 20 年以上入院されていたある患者さんは、主治医が私に代わった時、「自分は校長先生に騙されて、この病院に連れてこられ、そのうえ院長にも騙されてずっと入院させられている。

そのせいで、恋人も作れなかったし、結婚もできなかったし、子供も作れなかった。何とかしてしてほしい」と切々と私に訴えました。この言葉がこの病気の大変さを表しています。その頃から 30 年近くが経ち、統合失調症に対する医療もだいぶ変わりました。入院期間は随分短くなり、精神科病院の窓からは柵がなくなりました。

薬も以前に比べ副作用がずっと少なくなり、薬を服用しながら社会参加できる患者さんも増えました。ロータリアンの皆様とはあまり縁のない世界かもしれませんが、こういった病気で苦しんでいる患者さんも存在することを心に留めておいていただければ幸いです。

ご静聴ありがとうございました。



本日の食事



点鐘

会長 片平 博己君  
(担当 暮石 哲真)